一足早いクリスマスプレゼント：初めての日本訪問

オーガスティン・ブルブル・リベロ神父（バングラデシュ）
シグニス・バングラデシュ会長
『ウィークリー・プラティベシ』編集長

長年夢見ていた「日の出ずる国」日本への訪問。その夢は、2024年のシグニスアジア会議とシグニスジャパンの恩恵によって実現しました。私たちバングラデシュから来た司祭 4 人は、シグニスファミリーの一員として 9 月下旬にこの会議に参加しました。
9 月はクリスマスの雰囲気を感じるには早い時期ではありますが、日本に足を踏み入れた瞬間、私はまるで早いクリスマスプレゼントを受け取ったような気持ちになりました。それは期待をはるかに超えたものでした。この旅は、バングラデシュのカトリック司祭として個人的な大きな出来事であるだけでなく、深く私を感動させ、もてなし、寛大さ、礼儀正しさ、愛、そして雄弁な静けさに対する理解を新たにする霊的な旅でもありました。

日本に足を踏み入れた瞬間、まるで異なる世界に迷い込んだような感覚が私を包みました。整然とした街並み、現代と伝統の見事な融合、都市の喧騒、そして寺院の静寂――そのすべてが私を魅了しました。しかし、私を最も感動させたのは、日本の人々の驚くべき温かさと寛大さでした。外国人として、疎外感を覚えることを予想していましたが、日本人の親切心のおかげで、まるで自分の家にいるかのように感じることができました。日本では、言葉の壁を越えたコミュニケーションの方法を体験しました。言葉が異なっていても、全ての日本人の歓迎する姿勢や態度のおかげで孤立を感じることはありませんでした。初日の鉄道駅で、私たちはシステムや言語、場所に不慣れで困難に直面しました。その時、一人の日本人女性が自発的に助けてくれました。彼女は駅の外に出るのを助けてくれただけでなく、タクシーを手配して目的地まで送ってくれました。その女性は、私にとってまるで導きの星のようでした。本当に、日本人はその静かで謙虚な性格で私を温かく迎え入れ、その心遣いは私の心に深い印象を残しました。

キリスト教の司祭として、私の人生の多くは説教や祈り、助言を行うという「話す行為」によって形作られてきました。しかし、日本では沈黙の中にある畏敬の念を深く感じました。日本人は静かな思索と配慮を大切にしていることで知られており、その文化の中でそれを目の当たりにしました。

滞在中、私は築地教会を含むいくつかのキリスト教会を訪問する機会に恵まれました。それらの中には百年以上も前に建てられた教会もありました。少数派の宗教（0.3%）でありながら、キリスト教

がいかにその信者の生活に深く根付いているかを目の当たりにし、感銘を受けました。日曜礼拝に参加した際、会衆の敬虔で静かな献身の姿に深く心を動かされました。日本の小さいながらも献身的なキリスト教コミュニティの信仰は、神の存在が国境や文化、言語を超えていることを私に思い出させました。バングラデシュ教会の状況、小さな羊の群れ（0.3%）が逆境にもかかわらず塩と光としての役割を果たす機会を持っていることを振り返りました。鎌倉では、ミサ後に何人かの人々と出会い、それぞれの国の状況に焦点を当てて信仰、課題、希望について語り合いました。文化や言語、考え方の違いがあっても、私たちはキリストの教えを信じる信仰という共通点を見出しました。

日本は、訪問後も私の心に響くいくつかの貴重な教訓を教えてくれました。特に、静かな寛大さの力について学びました。日本人は義務感からではなく、他者への深い敬意から与えるのです。小さな親切な行為であれ、大きな行動であれ、その寛大さは、私たちが皆大きな家族の一員であるという理解に根ざしています。

この日本訪問は、新しい土地への旅以上のものでした。それは、人間のつながり、もてなし、信仰に対する私の理解を深める霊的巡礼の旅でした。そして、クリスマスの精神は特定の場所や文化、伝統に縛られるものではないということを思い出させてくれました。日本で体験した愛、寛大さ、温かさは、私にとって一足早いクリスマスプレゼントであり、これから何年も私を鼓舞し続けるでしょう。このクリスマス、私は日本での忘れられない体験—笑いと愛、そして意味深いつながりに満ちたもの—を自分自身への贈り物として受け取りました。私は、豊かに触発され、日本を去りましたが、永遠に大切にしたい思い出を持ち帰りました。初めての訪問を振り返ると、最も素晴らしい贈り物は、周りの人々の心から来るものだと思い出されます。そして何より、私たちの違いを超えて私たちを結びつける愛、それこそがクリスマスの真髄であると私は心に刻みました。

2024 年 12 月

（*AI* の助力を得ています）